

青年の父・母へのアタッチメント表象と自尊感情の関係

李 和 貞

【問題と目的】

人はどのようにして自分自身について認知していくのであろうか？人間のライフスパン（life-span）における発達のような研究の中で，最も中心的な理論は，自己（self）に対する理論である（Cassidy, 1990；Chen, 1990）。多くの研究より，自己概念は個人の行動，感情，動機，社会性，仲間関係およびパーソナリティの発達に影響を及ぼす規定因の一つとして示唆されてきた（Coopersmith, 1981；Harter, 1983；Hartup, 1983；Damon & Hart, 1988；Papalia, 1989）。

人間の行動における重要な説明変数として自己概念は，その定義においても研究者によって異なる観点から捉えられている。例えば，個人の自我実現，幸福感における重要な影響力の有する心理的要因として（Coopersmith, 1981），また自己に関してもっている知識（self, knowledge）のネットワークとして（Markus & Wurf, 1987）定義され，また，Harter（1982）は，自己に対する評価的態度，価値判断であると定義しているが，一般的に，自己概念は，他者との関わりにおいて自分自身によって認知された様々な側面における自己の内容を意味する。

GecasとSchwalbe（1986）は，自己の発達における最も重要で決定的な要因について親及び家庭からの影響をあげているが，一般的な考え方から，親との関係は子どもが最初に形成する対人関係であり，親との親密的で集中的な相互作用が人のその後のパーソナリティの発達において重要な要因となりうることは，十分予想される。

愛着理論は，子どもの家族経験と社会的情動的な発達の関係を説明する有力な理論として注目されているが，多くの研究によって，養育者への愛着と子どものその後のパーソナリティ及び社会人格的発達において（Easterbrooks & Goldberg, 1990；Wartner, Grossmann, Fremmer, Bombik, & Suess, 1994），また社会的特性（George & Main, 1979；Mueller & Silverman, 1989）との間において，その関係性が示唆された。特に，愛着研究の開拓者として愛着理論を確立したBowlby（1971）は，乳児期に形成される養育者に対するアタッチメント（愛着）は，そのままの形で持続されるのではなく，時間の経過とともに自己と他人に対する信念として再構造化し，

その再構造化されたものを内的作業モデル（internal working model）として命名した。そのような理論的背景のもと、親に対する内的作業モデルと自己に関する内的作業モデルの補完的關係について、幼児期を対象にした実証的研究が報告されている（例えば、Cassidy, 1988；Versehueren et al., 1996；Versehueren & Marcoen, 1999；再引用（李，2000））。

しかし、愛着理論を乳幼児期における親子関係の特有な概念としてだけでなく、青年期・成人期の発達の特徴の説明概念として捉えていくためにも、青年期を対象にした実証的研究が必要である。

従来の青年期を対象にした愛着研究は、異性あるいは一般他者との対人関係の様式を愛着スタイルとして捉える傾向が強く、最も重要な愛着人物である養育者とのアタッチメントを中心とした関係性及びそのアタッチメント表象そのものについては、研究の数が少ないという現状である。

また、報告された研究の大半が、そのアプローチにおいて、多様な家族システムとの関連性をもつ家族水準的な観点からではなく、主に母子関係を中心とした一面的な水準にとどまっていることは問題点の一つとして指摘できる。即ち、従来の愛着研究では、愛着人物として主に母親に集中している場合が多い。もちろん、養育者としての母親の主要な役割を否定することではないが、父親の子どもへの発達のかかわりをみていく上で、父子の愛着関係に着目することは重要な手がかりを与えると考えられる。一般的な考え方から、子どもは母親と同様に、父親からかなりの多くの世話を受けており、重要な対象として考えられる。そして父親との間に形成されるアタッチメント関係は子どもの発達にプラスの意味をもっていることが十分に予想される。

以上のことから、本研究では、青年期のアタッチメントに対する基礎的な研究の一部として、まず、大学生に焦点を当て、青年の父・母へのアタッチメント表象について注目する。従来、青年期は、激しい感情や不安の渦中として表現され、また親からの心理的離乳が加わる不安定感の強い時期として考えられるが、その時期において、青年は、どのような親へのアタッチメント表象を有するのかを検討する（第1研究目的）。そして、自尊感情に関するHarter（1982）の定義に従い、自己概念を自分自身に対する評価や価値概念（自尊感情）として見なし、大学生の父・母へのアタッチメント表象と自尊感情との関係性について検討する（第2研究目的）。これらの研究目的について、母親のみならず父親へのアタッチメント表象にも注目し、家族システム的な観点から検討を行う。

尚、本研究では、アタッチメント表象を、前述したBowlbyの定義に従い、大学生の重要な愛着人物である母親及び父親に対する内的作業モデルとして、また自尊感情を自分自身に対する評価及び価値に関する自己に対する表象として定義する。

【対象と方法】

対象は、東京都内の3つの大学において、心理学及び教育学関係の講義を受講している学生（計544名）を対象に調査を行った。その結果、男性279名、女性216名の計497名（平均年齢20歳；SD = 1.89）の有効回答を得た。調査期間は2005年5月下旬から7月中旬までの間で、調査時間は15～20分程度であった。

調査内容

質問紙は、父・母へのアタッチメント表象に関する質問紙（30項目）と自尊感情尺度（10項目）から構成されていた。なお、回答者のデモグラフィックな特徴を問う項目については、表紙に配置し、性別、年齢及び兄弟数を記入させた。

父・母へのアタッチメント表象に関する質問紙

李（2005）の青年の母親に対する愛着スタイル尺度を参考に、母親及び父親に対する大学生のアタッチメント表象に対する質問紙を作成し、検討を行った。李（2005）の尺度は、母親に焦点を当てた3カテゴリー（安定型、回避型、アンビバレント型）の愛着スタイルの表象を測定する尺度であるが、本研究においては、安定、回避、アンビバレントに対する愛着スタイルの表象を、それぞれ、安定的なアタッチメント表象、回避的なアタッチメント表象、アンビバレント的なアタッチメント表象として解釈する。評定については、“まったく当てはまらない = 1” から“非常によく当てはまる = 5” の5件法を用いた（項目はTable1参照）。

自尊感情尺度

Rosenberg（1965）の自尊感情尺度10項目を邦訳した山本ら（1982）の自尊感情尺度を用いた。ローゼンバーグの自尊感情尺度は、自分自己について全体的にどのような見方をしているのかを測定するための尺度として、十分な再現性と尺度化可能性があることが確認されている。回答形式は、“あてはまる = 5” からあてはまらない = 1” の5件法を用いた。得点化は項目ごとに自尊感情の高い反応から、5，4，3，2，1点とした。

尚、自尊感情尺度については、固有値の差から先行研究同様1因子が確認された（ α 係数 = .83）ため、項目の得点を合計し自尊感情得点として見なした。

上記の質問紙から得られたデータについて、

1. 父・母へのアタッチメント表象の因子分析
2. 大学生のアタッチメント表象に対する検討
3. アタッチメント安定性と自尊感情との関係性について検討

を通して父・母へのアタッチメント表象と、大学生の自尊感情との関係について検討した。

【結果】

父・母へのアタッチメント表象の因子構造

まず、母親に対するアタッチメント表象に対する尺度について、因子構造を検討するため、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、Table 2 に示したように、先行研究で得られた結果と同様の3因子を抽出することができた。また、父親に関しても、固有値が1以上であることや因子負荷量（.35以上）及び解釈可能性という3つの観点から、因子分析を行った結果、想定した3因子のまとまりを見出すことができた。母親及び父親それぞれ、安定的なアタッチメント表象に関する5項目が負荷の高かった第1因子（例えば、「母/父と一緒にいると安心する」、「母/父と私は、深い愛情に結ばれている」）を「安定」因子とし、同様に第2因子（例えば、母/父に助言や助けを求めない」、「母/父に自分のことを必要以上に話すのを好まない」）を「回避」とし、第3因子（例えば、「私が親の近くにいたがる時、親はうっとうしく思っているのではないか心配になる」、「母に見放されるのではないかと、不安になる」）を「アンビパレント」と命名した。

Table 1 父・母へのアタッチメント表象項目と因子負荷量（ $N=497$ ）

項 目	母親	父親
第1因子「安定型」（5項目）（母親： $\alpha=.85$ ，父親： $\alpha=.82$ ）		
父・母と一緒にいると安心する	.788	.778
父・母と私は、深い愛情に結ばれている	.350	.406
嬉しいことがあると、誰よりも父・母に喜んでもらいたい	.762	.667
父・母を完全に信頼することはできないと思う（R）	.782	.573
父・母とは、できるだけ、あまりかかわりたくない（R）	.544	.555
第2因子「回避型」（5項目）（母親： $\alpha=.82$ ，父親： $\alpha=.83$ ）		
父・母に助言や助けを求めない	.765	.766
父・母に自分のことを必要以上に話すのを好まない	.893	.899
父・母に個人的な感情や考えを打ち明ける（R）	.559	.431
父・母に助けてもらわず、自力でやることを好む	.528	.569
困ったことがあっても父・母に相談したくない	.485	.488
第3因子「アンビパレント型」（5項目）（母親： $\alpha=.76$ ，父親： $\alpha=.82$ ）		
私が父・母の近くにいたがる時、父・母はうっとうしく思っているのではないか心配になる	.511	.746
父・母に見放されるのではないかと、不安になる	.665	.521
父・母は、私と一緒にいたくないのではないかと不安になる	.643	.789
父・母は、私をやっかいな存在として思うかも知れない	.768	.824
父・母と一緒にいる時、突然父・母に怒られるのではないかと、不安になる	.568	.625

（注1：（R）は反転項目である。）

尚、母親および父親に対するアタッチメント表象尺度の内的整合性を調べるために、Cronbachの α 係数を算出したところ、各因子の信頼性係数は比較的に高い値を示していたため（母親；第1因子=.85，第2因子=.82，第3因子=.76，父親；第1因子=.82，第2因子=.83，第3因子=.

82), 各因子に高く負荷している項目の評定尺度値の平均を各因子得点とし, さらに, アタッチメント表象の「安定」因子得点に, 不安的なアタッチメント表象を示す「回避」及び「アンビバレント」因子の逆転処理した合計を加えて, アタッチメント安定性得点を算出した。得点が高くなるほど, ポジティブなアタッチメント表象に示すと解釈された。

一方, 因子間相関は, 母親の場合, “安定型”と“回避型”が $-.39$, “安定型”と“アンビバレント型”が $-.39$, “回避型”と“アンビバレント型”が $.31$ であり, 父親においては“安定型”と“回避型”が $-.67$, “安定型”と“アンビバレント型”が $-.20$, “回避型”と“アンビバレント型”が $.31$ であった。

父・母へのアタッチメント表象の性別差について

父・母に対するそれぞれの3因子について, 性別による因子得点を比較すると, Table 2の通りになり, 母に対するアタッチメント表象においては, 「安定」, 「回避」の因子に差が見られた。つまり, 母親に対する安定的な認識については, 男子大学生より女子大学生の方が, また回避的な認識については, 女子大学生よりも男子大学生の方がその傾向性が強いことを示す。一方, 父に対するアタッチメント表象においては, 「安定」, 「アンビバレント」の因子に差の有意傾向が見られ, 女子大学生の方が男子大学生より父親に対する安定的なアタッチメント表象を, また男子大学生の方が女子大学生より父親に対するアンビバレントなアタッチメント表象をもつ傾向があることがわかった

そこで, 大学生の性別による父親及び母親に対するアタッチメント表象の差について, より具体的に検討を行うため, アタッチメント表象尺度の各項目得点の平均値による検討を行った。Table 3に示された通り, 女子大学生と男子大学生の両群を比較すると, まず, 母親に対するアタッチメント表象の場合, 女子大学生においては, 「嬉しいことがあると, 誰よりも母に喜んでもらいたい (安定因子)」, 「母と私は深い愛情に結ばれている (安定因子)」, 「母と一緒にいると安心する (安定因子)」及び「母に個人的な感情や考えを打ち明ける (回避因子 (逆転項目))」, また「母と一緒にいる時, 突然母に怒られるのではないかと, 不安になる (アンビバレント因子)」の5項目に $0.5 \sim 5\%$ のレベルで有意に高い値が認められた。

一方, 男子大学生においては, 安定因子 (逆転項目) の項目である「母とはできるだけかわりたくない」, 回避因子の項目である「母に助言や助けを求めない」, 「困ったことがあっても母に相談したくない」及び「母に助けてもらわず, 自力でやることを好む」, 「母に自分のことを必要以上に話すのを好まない」が, そして, アンビバレント因子である「私が母の近くにいたがる時, 母はうっとうしく思っているのではないかと心配になる」の6項目において, $0.5 \sim 5\%$ のレベルで有意に高い値が示された。

また, 父親に対するアタッチメント表象においては, 女子大学生群では, アタッチメント表象については, 安定因子である「嬉しいことがあると, 誰よりも父に喜んでもらいたい」, 「父と私

は深い愛情に結ばれている」,「父と一緒にいると安心する」の3項目に1～5%のレベルで有意に高い値が認められた。一方,男子大学生群においては,アンビバレント因子である「私が父の近くにいたがる時,父はうっとうしく思っているのではないか心配になる」,「父は,私と一緒にいたくないのではないかと不安になる」,「父は,私をやっかいな存在として思うかも知れない」の3項目が5%のレベルで有意に高い値を示した。

Table 2 アタッチメント表象尺度の因子得点の平均と有意差（性別差）

因 子	女子大学生		男子大学生		有意差
	MEAN	SD	MEAN	SD	
(母親) 安定	19.78	4.72	17.58	4.30	***
(母親) 回避	13.04	5.10	15.47	4.52	***
(母親) アンビバレント	7.56	3.28	7.75	3.12	NS
(父親) 安定	17.19	5.72	16.35	4.61	+
(父親) 回避	16.19	5.37	16.29	4.65	NS
(父親) アンビバレント	7.76	3.61	8.35	3.65	+

(***: $p < .005$ +: $.05 < p < .10$ である。)

Table 3 平均値において有意差のみられた項目

女子大学生において高い項目		男子大学生において高い項目	
母親に対するアタッチメント表象		母親に対するアタッチメント表象	
・嬉しいことがあると,誰よりも母に喜んでもらいたい。	***	・母とはできるだけかわりたくない。	***
・母と私は深い愛情に結ばれている。	***	・母に助言や助けを求めない。	***
・母と一緒にいると安心する。	***	・困ったことがあっても母に相談したくない。	***
・母に個人的な感情や考えを打ち明ける。	***	・母に助けてもらわず,自力でやることを好む。	***
・母と一緒にいる時,突然母に怒られるのではないかと,不安になる。	**	・母に自分のことを必要以上に話すのを好まない。	**
		・私が母の近くにいたがる時,母はうっとうしく思っているのではないか心配になる。	**
父親に対するアタッチメント表象		父親に対するアタッチメント表象	
・嬉しいことがあると,誰よりも父に喜んでもらいたい。	**	・私が父の近くにいたがる時,父はうっとうしく思っているのではないか心配になる。	*
・父と私は深い愛情に結ばれている。	**	・父は,私と一緒にいたくないのではないかと不安になる。	*
・父と一緒にいると安心する。	*	・父は,私をやっかいな存在として思うかも知れない。	*

(***: $p < .005$ ** $p < .01$, * $p < .05$ である。)

父・母に対する大学生のアタッチメント表象と自尊感情の関係

アタッチメントの次元から、大学生の自尊感情における関連の検証を行うため、前述した方法で、母親および父親に対するアタッチメント安定性得点を算出した。それらの得点の平均及び標準偏差は、母へのアタッチメント安定性は、 $M=56.48$ ； $SD=10.29$ ，父へのアタッチメント安定性は、 $M=52.42$ ； $SD=11.13$ であった。

次に、算出されたアタッチメント安定性得点をもとに、父・母それぞれの平均値を境に高得点群と低得点群を作成した。2群に分割した後、父・母それぞれにおいて、アタッチメント安定性と性を要因とし、自尊感情得点を従属変数とした2要因分散分析を行った。

その結果、まず、母親に対する場合、性とアタッチメント安定性群における交互作用はみられず、自尊感情における「性別」との有意な主効果 ($F(1,491)=6.62, p<.01$) 及び「アタッチメント安定性」の有意な主効果がみられた ($F(1,491)=23.17, p<.001$)。これら主効果では、母親に対するアタッチメント安定性において、女子大学生の方が男子大学生よりアタッチメントの程度が高く、またアタッチメントの程度が高いほど自尊感情の程度が高くなる傾向があることが示された（＝アタッチメント安定性の得点が高くなるほど自尊感情得点は高くなる傾向があった）

一方、父親に対する場合においては、交互作用が有意傾向を示した ($F(1,491)=3.27, .05<p<.10$)。性別の単純主効果を検討したところ、アタッチメント高群において性の単純主効果が有意であった ($F(1,491)=7.95, p<.01$)。また、アタッチメント安定性の単純主効果を決定したところ、男性においてアタッチメント安定性の単純主効果が有意であった ($F(1,491)=18.60, p<.001$)。（Figure 1 参照）

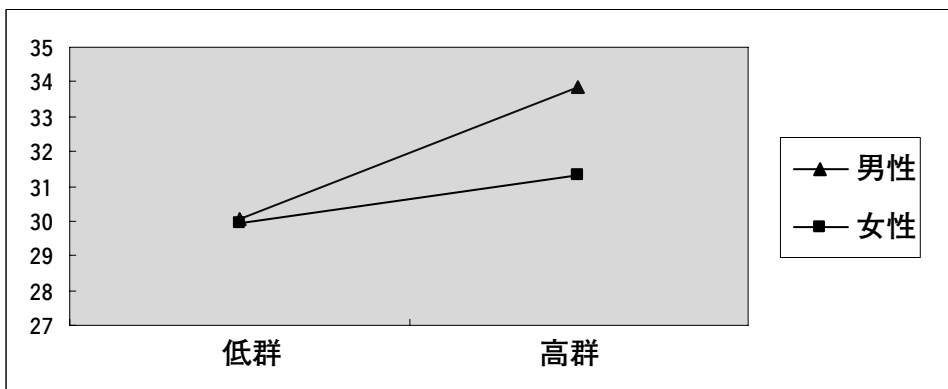


Figure1 父へのアタッチメント安定性（高群・低群）と自尊感情の関係

父・母へのアタッチメント安定性のパターンと自尊感情との関係

父・母へのアタッチメントが自尊感情に及ぼす影響をさらに深く知るために、父・母へのアタッチメント安定性得点の高低(父・母それぞれの平均値を境に、高得点群と低得点群を作成した)の組み合わせによって、次のようなアタッチメントパターンの4つのグループを作成した。

即ち、母親及び父親のアタッチメント安定性において高群であれば、“父・母愛着群”に、母親への安定性が高群で父親が低群であれば“母愛着群”，同じように、父親への安定性が高群で母親が低群であれば，“父愛着群”に、親両方への安定性とも低群であれば，“愛着希薄群”として分類した。以上の基準で分類を行い、これらのパターンによる自尊感情の差を検討するために、性とアタッチメントパターンを要因とする2要因分散分析を行った。尚、分散分析における男性の各セルの人数は、父・母愛着群96名、母愛着群57名、父愛着群55名、愛着希薄群116名であった。女性の各セルの人数は、父・母愛着群105名、母愛着群32名、父愛着群13名、愛着希薄群66名であった。Table4に各群の平均値と標準偏差を示す。

Table 4 父・母へのアタッチメント安定性のズレと性別による自尊感情の平均値と標準偏差

アタッチメント 安定性のズレによる分類	女子大学生		男子大学生	
	MEAN	SD	MEAN	SD
父・母愛着群	31.60	7.24	34.76	7.07
母愛着群	31.31	5.37	32.04	7.27
父愛着群	31.91	7.43	31.19	8.46
愛着希薄群	28.74	6.16	29.95	7.97

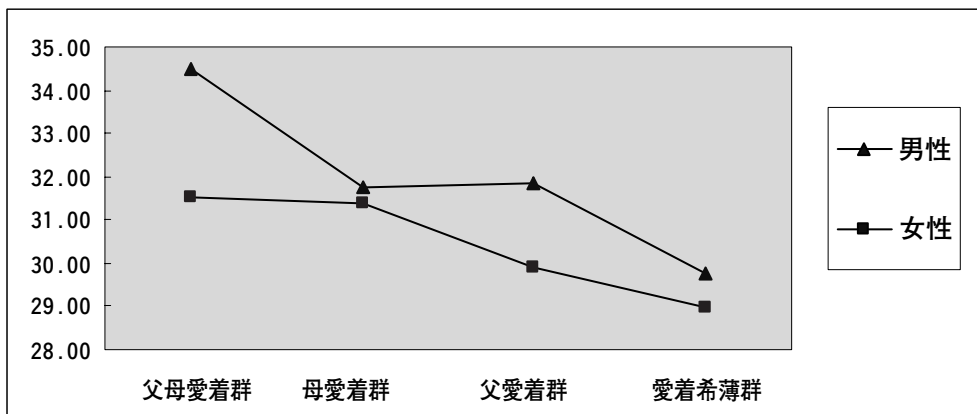


Figure2 父・母へのアタッチメント安定性のパターンと自尊感情の関係

分散分析の結果，“アタッチメントパターン”の主効果が見られ（ $F(1,487)=8.41, p<.001$ ）），多重比較の結果，“父・母愛着群”が“愛着希薄群”と比較して，自尊感情の得点が有意に高い傾向を示めされた。即ち，両親へのアタッチメントの程度が高ければ高いほど，両親へのアタッチメントの程度が希薄な群に比べ，大学生の自尊感情は高い傾向があった（Figure 2 参照）。

【考察】

本研究では，大学生のアタッチメント表象に焦点を当て，その主要なアタッチメントの対象を母親だけでなく，父親にも注目し，アタッチメントの対象に対する表象の男女差について，そして，アタッチメント表象と自尊感情（自己に対する内的作業モデル）との間に存在する補完的な関係性について検討を行った。

その結果，父・母に関するアタッチメント表象において，男子大学生と女子大学生において異なる傾向が示された。即ち，母親に対するアタッチメント表象においては，女性の方が，安定的なアタッチメント表象を有する傾向が強く，男子の場合は，より回避的なアタッチメント表象を有する傾向が強いことが示された。また父親に対するアタッチメント表象については，安定的な表象とアンビバレント的な表象の間において性差が見られ，女性の方がより安定的なアタッチメント表象を，また男性の方がよりアンビバレント的な表象を示す傾向が示された。

このような結果は，母子関係及び父子関係を中心とした，青年期の発達の特徴から示唆される性差及び子と母に対する父・母の養育態度の相違から考察することができる。即ち，先行研究の知見によると，青年期において女子は男子より母親に親しみを感じやすく（Paterson et al.1994），また，父親は，娘と息子と場合において異なる養育態度を示す傾向があり（例えば，女兒に対しては直接的に権威を行使しなくてもすんだり対立したりする状況が少ない），父親は，父－息子関係にくらべて父－娘関係においてより甘い態度を示すことが指摘されている（小野寺，1984）。

また，アタッチメント表象と自尊感情の間において，Bowlbyのアタッチメント表象と自己との関係性に対する仮説的な主張を支持する有効な関係性が確認された。即ち，父・母に対するアタッチメント安定性の高い群は，アタッチメント安定性の低い群と比べ，自尊感情が高く，父・母へのアタッチメント表象と自尊感情との間に有意な補完関係が認められた。

また，その上，家族システムの観点から，父・母へのアタッチメント安定性の一致・ズレの程度による検討を行った結果，父親及び母親へのアタッチメントの安定性が高い群は，父親へも母親へもアタッチメントの安定性が低い群に比べ，自尊感情において有意に高い得点を示した。このような結果は，従来の，母親へのアタッチメントと自尊感情の関係を強調する知見（Hoffman et al., 1988; Burke & Weir, 1978），及び父親へのアタッチメントの影響を強調する知見（LeCroy, 1988; Gecas & Schwalbe, 1986）の両方の主張を含めた結果であり，母親のみならず父親に対するアタッチメントの有効性を強調するものである。また，Bowlby（1973）の「自己についてのワーキング・モデルは愛着人物に対するワーキング・モデルと補完的な関係から構築され

る」の主張を実証する青年のアタッチメントの人物として、母親と父親の有効性が確認されたと考えられた。

最近、父親の柔軟な育児が子どもの発達に影響を及ぼすといった、子どもの発達における父親の存在および役割を強調した知見が多く報告されているが（例えば、中野・牧野、1996; 加藤ら、2002）、本研究の結果より、さらに、今後の青年期を中心とするアタッチメントの研究において、母親のみならず父親へのアタッチメントを注目する研究の可能性及び必要性が示唆されたと思われる。また、家庭における養育の形態及び家族構成が大きく変化しつつある現代社会において新たな視点を提供することができたと言えるであろう。

本研究では、青年の自己概念を自分への評価及び価値概念として捉えたため、自尊感情に注目し青年の父・母へのアタッチメント表象との関係について検討したが、今後、より多面的な側面からの青年の自己概念を捉えたアタッチメントの研究が期待される。

謝辞

本調査にご協力下さいました協力大学の先生並びに学生の皆様に厚く御礼申し上げます。そして本論文の執筆にあたりご指導下さいました早稲田大学の中垣啓先生に深く感謝致します。

参考文献

- Ainsworth, M. D. S. 1979 Infant-mother attachment. *American Psychologist*, 34, 932-937.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bowlby, J. 1976 黒田実郎・大羽泰・岡田洋子（訳）母子関係の理論Ⅰ：愛着行動，東京，岩崎学術出版社。 [Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss*, vol. 1: *Attachment*. London, Hogarth.]
- Bowlby, J. 1977, 1991 黒田実郎・岡田洋子・吉川（訳）母子関係の理論Ⅱ：分離不安，東京，岩崎学術出版社。 [Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss*, vol. 2: *Separation*. London, Hogarth.]
- Bowlby, J. 1981, 1992 黒田実郎・岡田洋子・吉川（訳）母子関係の理論Ⅲ：対象喪失，東京，岩崎学術出版社。 [Bowlby, J. 1980 *Attachment and Loss*, vol. 3: *Loss, Sadness and Depression*. London, Hogarth.]
- Bowlby, J. 1988 *A Secure Base*. New York: Basic Books.
- Broughton, J. M. 1978 Development of concepts of self, mind, reality and knowledge. *New Directions for Child Development*, 1, 75-100.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. Simpson & S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp. 46-76). New York: Guilford Press.
- Burke, R. J., & Weir, T. 1978 Benefits to adolescent of informal helping relationships with their parents and peers. *Psychological Review*, 42, 1175-1184.
- Cassidy, J. 1988 Child-mother attachment and the self in the six-year-olds. *Child Development* 59, 121-134.
- Cohn, D. A. 1990 Child-mother attachment of six-year-olds and social competence at school. *Child Development* 61, 152-162.
- Collins, N. L., & Read, S. J. 1990 Adult attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 644-663.
- Demon, W., & Hart, D. 1988 *Self-understanding in childhood and adolescence*. Cambridge University Press.
- Easterbrooks, A., & Goldberg, W. 1990 Security of toddler-parent attachment: relation to children's socioperson-

- ality functioning during kindergarten. In M.T. Greenburg, D. Cicchetti & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years* 221-244. Chicago: University of Chicago Press.
- Gecas, V., & Schwalbe, M. 1986 Parental behavior and adolescent self-esteem. *Journal of Marriage and the Family*, 48, 37-46.
- George, C., Kaplan, N., & Main, M. 1984 *Adult Attachment Interview Protocol*. Unpublished doctoral dissertation, University of California at Berkeley.
- George, C., & Main, M. 1979 Social interactions of young abused children: Approach, avoidance, and aggression. *Child Development* 50, 306-318.
- Harter, S. 1982 The perceived competence scales for children, *Child Development* 53, 87-97.
- Harter, S. 1983 Developmental perspectives on the self-system. In E.M. Hetherington (ed.), *Social development: Carmichael's manual of child psychology*. New York: Wiley.
- Hartu
- p, W. W. 1983 Peer relations. In E. M. Hetherington (Ed.), P. H. Mussen (Series Ed.), *Handbook of Child Psychology: Vol.4: Socialization, Personality, and social development* (pp.103-198). New York: Wiley.
- Hoffman, M. A., Ushhpiz, V., & Levy-Shiff, R. 1988 Social support and self esteem in adolescence. *Journal of Youth Adolescence*, 17, 307-316.
- 加藤邦子, 石井クンツ昌子, 牧野カッコ, 土谷みち子 2002 父親の育児かわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響: 社会的背景の異なる2つのコホート比較から 発達心理学研究 13 (1), 30-41
- 久保田まり 1994 アタッチメントの研究: 内的ワーキング・モデルの形成と発達, 川島書店.
- LeCroy, C. 1988 Parent-adolescence intimacy: Impact on adolescent functioning. *Adolescence*, 23, 137-147
- 李和貞 2000 幼児の自己概念及び父・母の養育態度に関する研究: 日・韓の5歳児における愛着を中心に お茶の水女子大学大学院 修士論文
- 李和貞 2002 子どもの社会情緒的発達と父・母の養育態度に関する研究, 日本理論心理学研究 4, 22-23.
- 李和貞 2005 3因子構造の青年用愛着尺度作成の試みとその検証, 早稲田大学教育学研究科紀要別冊13号-1, 73-81.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.) Points of attachment theory and research. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50 (1-2, Serial No. 209), 66-104.
- Markus, H., & Wurf, E. 1987 The dynamic self-concept: A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, 38, 299-377.
- 中野靖彦・牧野菜々子 1996 子どもの自己意識の発達に関する研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告巻号 20, 209-213
- Nokker, P., & Feeney, J. A. 1994 Relationship satisfaction, attachment, and nonverbal accuracy in early marriage. *Journal of Nonverbal Behavior*, 18, 199-221.
- 小野寺敦子 1984 娘からみた父親の魅力 教育心理学研究, 55, 289-295.
- Paterson, J. E., Field, J., & Pryor, J. 1994 Adolescents' perceptions of their attachment relations with their mothers, fathers, and friends. *Journal of Young and Adolescence*, 23(5), 579-600.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. New Jersey: Princeton Univ. Press.
- Verschuere, K., Marcoen, A., & Schoefs, V. 1996 The internal working models of the self, attachment and competence in five-year-olds. *Child Development* 67, 2494-2511.
- Verschuere, K., & Marcoen, A. 1999 Representation of self and socioemotional competence in kindergartners. *Child Development* 70, 183-201.
- Wartner, U. G., Grossman, K., Fremmer-Bombik, E. & Suess, G. 1994 Attachment patterns at age six in south Germany: Predictability from infancy and implications for preschool behavior. *Child Development* 65, 1014-1027.